



坂東玉三郎

Bando Tamasaburo

舞台に立つために朝起きて、 明日の舞台のために生きていく



Photo / Takashi Okamoto

舞台こそ人生のすべて

美という言葉はこの人のためにあるのではないだろうか？一度でも舞台を観るとその美しい姿や立ち居振る舞いが目に強烈に焼き付き、心を激しく揺さぶられる。歌舞伎俳優という枠を遙かに超え、世界の一流芸術家とのコラボレーションを実現させ、日本はもとより世界から賞賛され続ける五代目坂東玉三郎さん。歌舞伎座終演後の観客の興奮がまだ残る中、舞台芸術の魅力や将来について話を伺った。

「演技というのは人間の感情の再構築だと私は考えています。そして人間の感情表現というのは『感受』、『浸透』、『反応』という3つの過程を辿って生まれます。われわれ俳優は舞台で、その感情を再構築するわけです。それは感情を伝えるために根本的に一番大切なことは何か？それは人と人とが実際に劇場という場で出会うことだと思います。今ではテレビやDVDやコンピュータなどがあり、そこで演劇も観ることができるようでも、やはり人間同士が同じ時間と空間を共有して、一体となって観るということが舞台芸術の一番の価値だと思いますし、大事にしていかなければならないことだと思いますよ。これは劇場が大きかろうが小さかろうが、昔も今も同じだと思います。江戸時代の芝居小屋でも今の歌舞伎座でも俳優が観客の目の前にいるということ。これは古今東西、万国共通です。

今はたくさんメディアが登場して、手軽な楽しみ方が増え、劇場に足を運ぶお客様が減少しているという時代ですが、どんなに進んだ映像があっても、目の前で繰り広げられる演者の気迫や感情の表現、アクロバティックな動きや、意外性、そして演技の奥にあるものは、実際に目の前で体験してみないことにはその本質は伝わらないと思うんです。そして芝居というのは異次元の世界です。非日常の時空間を俳優と

大勢のお客様とが共有して作り上げるものです。ですから、そういう魅力を感じてもらえるものをどうやって作っていくのか、あるいはお客様がどうやってその魅力を見つけてくれるか、何を望んでいるのかを常に私たちが考えていかなければならないのだと思います」

舞台芸術は一朝一夕にできたものではない。先人の涙ぐましい精進や情熱、観客の感動が次々と伝承され、長い時間をかけて進化し熟成され続けてきた。そして今を生きる玉三郎さんも芸術家として頂点を日々追い求めている。

「私はいろんな意味で自分の人生をかけて芝居をしているつもりです。簡単に言うと、人生のすべての時間を舞台の上で演じる瞬間にかけているということのように思います。日頃の健康や自己管理もそうでしょうし、お稽古もそうでしょう。作品に対する俳優としての取り組みの時間、いろいろなものを見たり調べたり、身につけるものを用意したり、時には素材から探して職人さんに作ってもらうこともあります。衣装だけでなくお化粧も含めて、いつも最高の状態で舞台に立つように務めています。スムーズにその役に入っていく手立てや舞台での芝居が絵になるために、いつも考え続け、舞台の一瞬のためにできる限りのことはやらなければならない、やり続けなければならないのです。

俳優の修行というのは 若い時にあれこれ迷ったり、いろんなことに興味を持ち、一つのことに集中することが難しい時期にあえて脇目もふらずに集中して修行したことが一生を左右し、後々どれだけ自分に返ってくるか計り知れません。年齢を重ねていくと脇を見ている暇は無くなってきます。無事に舞台を務めることで精一杯です。若い時のように終演後どこに行こうか？開演前にどこかへ寄っていいこうかという気などもおきなくなります。今では舞台に立つために朝起きて、終演した



私はお客様を、 異次元の本質的な世界、 見えない世界に 連れていく案内人

「明日の舞台のために生きていく。嫌でもそうやっていくんです。若い時は力があります。力が有り余っている。その余力をどうやって内なるものに持っていく、それをどう一生続けていくのか俳優としての生き様です。」

普通に生きてきて、普通の人間が舞台に立つのではない。良かれ悪しかれ俳優は超人的でなければならぬのでしよう。だからこそ凝縮された修行をして舞台に立たなければお客様は感動しないし納得して下さりません。舞台で生き残るためには一人ひとりの自覚と修行が不可欠です。そしてそれを何気ない形で見せることがさらに大事です。凄いでしょと言って舞台に立つのではなく、何気なくやるからこそお客様は心から楽しめると思うんです」
すべては舞台の美のために、そして

玉三郎さんの美の奥には厳しい修行や鍛錬、飽くなき美への好奇心と探求があった。演技の奥にある世界についてさらに話は続く。

実演芸術の灯は決して消えない

「私が演技で一番大事にしていることは、役者を観ながら、あるいは芝居を観ているながら、その奥にある別の世界を感じてもらうことです。眼で楽しんでいるうちは二次元的ですよ。楽しんでるんだけれど知らないうちにさらに異次元の世界に誘っていく。異次元元といっても何も霊的な世界とかそういうのではありません。奥深い人間の本质ということでしょうか。幕があいて観ている世界よりもっと奥に時空を超えた異次元的世界がある。お客

様がそれを感じて体験ができることこそ、素晴らしい舞台だと信じています。例えばなぜ『鶯娘』のような踊りをやるのか？それは非現実の鶯娘を窓口に誘って、異次元の世界に入り込める。鶯娘が死んでいくことによって人生が見えてきたり、観ている人の中に悲哀を感じて頂いたり、叶わぬものが見えてきたり…。鳥である必要はないのだけれども鳥であることによって、逆に人間の悲哀や魂や感情が浮き彫りになり、観ている人達の中に入ってくる。ただ綺麗だねで終わっては観る意味はないかもしれません。すべての思いは叶わない、怨んでも怨んでも報われない情念などを清姫を通して表現したり、仏教でいう諸行無常や色即是空の世界を舞台で垣間見て貰いたいのです。それは劇場の中のことだけではなく、自分の人生の問題だし、人間の普遍的なことだと思えます。行き着くところは舞台も哲学や宗教と同じなのかもしれません。」

華やかな見た目や美しい衣装だったというのはいくまでも手立てなので。具体的に目の前で演じられていることの奥にある世界を本当に理解することの奥にそれが綺麗だとか美しいと感じることも先ずは大事だけれども、舞台の本質は奥にある世界をお客様に感じてもらうことだと私は思っています。そしてそのためには、やはり私自身が人生のすべてを舞台のために捧げないと伝えることは難しいと思えます。私がお客様を異次元の本質的な世界、見えない世界に連れていく案内人だと思っています」

奥にある世界があるからこそ、舞台を観て感動して、生き方を見つけたら、悲哀や恋心を感じて、人生により深みをもって生きることができるようになるのだから。そんな舞台芸術の将来を玉三郎さんはどのように考えているのだろうか。

「舞台に関わる者は本当に頑張らなければと、つくづく思います。実演芸術

の灯は決して消えないと思うし、消してはならないものだと思います。歌舞伎などは養成所もいっすけれど、まずは小さな子ども達を集めて踊ったり楽器を演奏したり、そして声を出す場を作らなければならぬと思います。小学校などでも音曲などにいつでも触れられたら最高ですね。頭ごなしに教えるということではなく、楽器に触れて「チン、ドン、ジャン」とやっているうちに好きになってくる。そうすればお稽古しろと言わなくても勝手に続けられるでしょうし、好きこそもの上手なれということ。これがきっかけとなって志を持って、お稽古を続けて舞台への道を歩んでいく子が一人でも増えて欲しいですね。」

歌舞伎は役者300人に対して3000人の裏方が支えて舞台ができて上がります。小道具の職人さんの後継者問題や素材の入手も難しいものもあります。そういったことも含めて、舞台で人と人が出会い、別の世界を感じてもらうために今われわれが何をしなければならぬか、そしてとにかくやってみることが急務だと思います。」

最近とても嬉しかったことがありません。ダンスパフォーマンスの世界で二十代三十代の若者が実演することに興味を持って、自分たちで活躍する場を作って頑張っているというのを聞きました。さんさんバーチャルだ、デジタルだ、という世界に浸りきって、逆に実演というものを新鮮に感じたり、人と人とが実際に会わなければ生まれえない感動や感情の大切さに気づいてきたのかもしれない。これは大きな希望です。私もこれからも人生のすべてを舞台に捧げて、これまで以上に精進していくつもりです。皆様、是非劇場でお目にかかりましょう」

PROFILE 歌舞伎俳優、当代きつての人氣と実力を誇り「奇跡の女形」といわれる。屋号は大和屋。7歳で坂東喜の字(きのじ)の芸名で初舞台を踏み、1964年歌舞伎座「心中刃は水の胡弓」で5代目坂東三郎を襲名。2011年京都府賞、12年に重要無形文化財歌舞伎女形保持者(人間国宝)認定、13年フランス芸術文化勲章最高章である「コマンドゥール」受章。



坂東
玉三郎

Bando Tamasaaburo